

文学史の方法としての精神史と、立場と

してのカトリシズムについて

榎 克朗

文学史というものは、文学についての様式史的研究と精神史的考察との総合の上に成立するものと考えられる。そして、様式にはこれに対応する精神があり、また、精神にはこれに対応する様式があるはずだから、どちらから出発しても、結局においては、一つところに帰着することになるのではないかと思う。ところで、はじめにすこし個人的な事情をのべておきたいのだが、わたしが大學の卒業論文において、源氏物語を宗教的文学として理解し、問題史的に考察するという試み——その立場や方法、また成果にいたつては、かえりみてまったく冷汗ものであつたといえ——をやつてから今日まで、學者としてのわたしの関心は、いつも文学を中心とする諸文化現象の精神史的考察にあつたといえる。今様の研究（「法文歌」「神歌」）にしても、声明關係の研究（「声明」「雜声明」「和讃」「古和讃」）にしても、決して單なる古典の文献學的研究が終局の目的だつたのではなく、卒業論文当時のあまりに高踏的な傾向に対する自戒として、しばらく基礎的實証能力をやしない、もつて將來を期しようとしたものであつた。それでも「雜声明」のなかでは、高辨（明惠上人）の作品にふれたついでに、そのころの時代精神の対照的な代表者として、かれと慈円および源空（法然上人）の三人をとりあげ、いさゝか駄弁を弄してみたいという欲求をおさえることができなかった。※※

※わたしは「宗教文学」と「宗教的文學」とを一応つかいわけることにした。すなわち、宗教文學とは宗教上の実體が文學的表現を借りてあらわれたものをさし、宗教的文學とは文學的意欲が宗教上の題材を利用したものゝをさすと規定しておく。もつと、この二つをあわせて、広義に宗教的文学とよぶこともさしつかえなからう。「宗教芸術」と「宗教的芸術」との別もまた、右に準ずる。

※※このテーマについては、昨年あるグループの例会でも話し、さらに「中世ニッポンの思想界」という一文にまとめておいたのだが。

それをのせるはずの紀要がまだ刊行のはこびにいたらない。もちろん、これは純粹に文學史の問題とはいいがたく、また精神史的方法としても、學的嚴密を期するといつたつもりのものではなかつたのだけれど。

それでは、精神史とは何ぞやということになると、まだ明確な通念はできあがつていないようであるが、ともかく、人文科學の一分科を考へるべきではなくて、精神的世界に対する特殊な觀察のしかたを意味する、つまり方法論上の一分だとするのが妥当であろう。

精神史的研究者は、人間の文化的いとなみはすべてなんらかの精神——個人・社会・民族・時代等の有する精神——によつて規定せられ、推進せられるものであると考へる。そして、人間の精神というものは、低次の段階においては、いまだ單なる知情意の斷片や混沌にしかすぎない事があつても、高次の段階に進めば、かならずなんらかの世界觀を要求し、形成し、またその世界觀を根底として、逆に人間精神の全体が規定せられ、形成せられるにいたるものである。

たとえば、カトリシズム・共產主義・実存主義というような世界觀は、現代人の精神が摸索の末に發見あるいは再発見するにいたつたものであると同時に、逆にこれらによつて現代人の精神がささえられ、方向づけられているところの 카테고리なのであつて、文學ないし藝術の面でも、これらは現在支配的な三大思潮にほかならない。また、資本主義によつて代表せられる近代的世界觀も、現實にはまだまだ根づよく残存しているわけである。

かような次第で、一口に精神史的研究といつても、人間精神の高低二段階に対応して、おのずから二つの層面をしめすことになるであらうと思われる。そして、この世界觀の面をこりあつかう高次の精神史こそ、わたしの当面の課題とするところなのである。

もちろん、文學のばあい、作家の世界觀が明白なかたちをこつて作品に反映するものとはかぎらない。文學から世界觀を歸納し、また世界觀から文學を演繹することは、ともに不可能である。しかし、作家や作品、あるいはこれをうける讀者や批評家、さらにこれらをこりあつかう研究者自身の世界觀を問題とすることなしには、現代の狀況下に文學

をかたることはほとんど不可能であり、また無意味にちかいであろう。現代はとくに明確な世界観の要求される時代だからである。ところで、現代はもはや決して近代ではない。芸術の面についてみても、美術にしろ、音楽にしろ、その様式・精神ともに、もはやまったく近代とはたもとを分つており、文學においてもその傾向はすでにはつきりとあらわれている。

いつたい近代精神というものは、一般にもいわれていることだが、二つのR、すなわちルネサンス(異教精神の復興)ミレフォルマチオン(宗教改悪)との結合によつて成立したと考えられる。

ルネサンスは、決して單なる古代文化の復興運動だつたのではない。ギリシャ・ローマの古典文芸が全中世を通じて熱心に復興せられていたことは、聖トマス・アキナスとアリストテレス哲学との關係一つをこりあげるだけでも、充分に証明されることがらである。こういうキリスト教的ルネサンスの系譜に対して、いわゆるルネサンスとは、古代の異教精神・世俗主義文化の復興を意味するものにほかならない。また、ルネサンスと密接な關係を有するヒューマニズムの思想についてみても、キリスト教的ヒューマニズムに対して、非キリスト教的ヒューマニズムがあらたに興つたわけである。

つぎにレフォルマチオンは、一般に宗教改革とよばれているが、原語も訳語ともに妥当とはいえない。当時カトリック教会の一部にみられたいくつかの腐敗現象は、トリエント公会議を契機として、多数の聖人たちの努力により一掃せられたのであるから、これをこそ「改革」とよぶべきなのである。(一般には反宗教改革といつてゐるが。)いわゆるレフォルマチオンとはこれに反して、キリストにより創立せられ、神學的にはキリストの神秘体とよばれる「教義」※に対する反抗運動(プロテスタンチズム)を意味する。これは、古代のアリウス派、中世のアルビ(カタリ)派とならぶ近代の大異端派であつて、ルター・カルブイン・ヘンリー八世らの傲慢・貪欲・邪淫にその端を発し、普遍的・客觀的眞理と道德を標榜するキリスト教を、單なる主觀主義・御都合主義に変化墮落せしめ、唯一なるべきキリストの教え

を、無数の諸宗派に分裂せしめたのであつた。また、プロテスタンチズムとくにカルバイニズムが、資本主義の成立に決定的な影響をあたえたことは、ウェーバーの説以来、一般にみこめられていることである。

(近代末期、ニューマン・ソロブイヨフらの改心帰正以来、心あるプロテスタント・アングリカン・ギリシア教等の信者、あるいは無神論者が、続々としてローマに復帰しつつある現状は、当然のこゝからであるとともに、また、なお離教・異端の陣営にとぎまつている人々のあいだでも、教会合同運動がさかんになりつつあるのは、まことに暗示的な現象であるといわねばならない。)

※マテオ聖福音書、聖明ウロの書簡等を参照。なお、使徒信經には「聖なる公教會」といい、ニケア・コンスタンチノポリスの信經では「唯一、聖、公、使徒承伝の教會」とのべている。

そして、この二つのRの合流から、個人主義・自由主義・觀念論・唯物論・科学万能主義さらに資本主義等の百面相をもつた近代精神が生れたのである。近代精神の特徴は、非宗教的・非道德的・分裂的であつて、統一的世界觀の欠如しているところに存する。近代精神が科学と技術とを生みだした功績は不滅であるが、全体としてみるときは、調和と秩序とを欠き、正しい方向を見失つていといわねばならず、その腐敗土の上にナチズムや共產主義のような毒草がはびこることになつたわけである。また、自由主義に由來する芸術至上主義は、一般に近代文学をば惡の華と化せしめたのであつた。

さて、現代の代表的世界觀の一つである実存主義は、現代精神の顯著な一形態であるにはちがいないが、これはむしろ、追いつめられた近代精神がさまよいこんだ袋小路とでもいつたほうがあたつていゝかもしれない。だから、実存主義の出現は、現代のはじまりというよりも、近代の終末を意味するものである。

サルトルは実存主義を「時代的・階級的現象」といつているそうだが、ともかく実存主義は克服されねばならぬ何ものかである。実存主義は統一的な世界觀ではありえず、その中核を形成する「不安」の意識は、ただクリスト教的平安

(バックス・ドミニ)との対照においてのみ、眞に了解せられうるものであつて、それゆゑカトリシズムとはまったくあいられない世界観であるにもかかわらず、カトリシズムとは無關係でありえない。また、ヤスパースの傾聴すべき歴史哲学がクリストを「例外」としてかたづけ、クリスト教に対して執拗な沈黙をまもつてゐることは、実存主義がカトリシズムとのあいだに存する緊張關係を、かえつてよく証明するものといえよう。実存主義は、共產主義やナチズムとともに、それ自体は宗教ではないが、これらは、論理的にも歴史的にもクリスト教と無關係であるところか、いわば神なき代用宗教として現代史に登場してきたものであつて、その意味で、つまりマイナスの宗教性にならう鬼子として單に非宗教的な近代精神をこえた、現代精神たるの資格をそなえてゐるわけなのである。

一方実存主義の一對極たるの位置をしめる共產主義とは、いうまでもなく、独特の經濟史觀にもとづいて、階級なき社會を將來するために、まず革命によつてプロレタリアの独裁を實現しようこつとめる、戰闘的世界観であつて、その当面の闘爭相手は資本主義であるが、窮極の敵は天主であり、クリストであり、その現世的實現たるカトリック教會であると考えられる。

共產主義の全体系は、惡魔的カトリシズム、もつと適切には新イスラムとでもいうべく、クリスト教とは根本的な対立と、奇妙な親近性^ミをしめしており、それにふくまれる宗教的萌芽や、現代異端としての性格については、ベルジャエフ・マリタンをはじめ、おおくの思想家によつて指摘せられてゐるところである。共產主義は近代精神に対する眞向からの否定挑戦であり、しかも、統一ある体系である点において、眞に現代的な世界観といえる。

ところで、今日、これらの現代的世界観、あるいはなお余命をたもつてゐる近代的不いしは前近代的世界観と、対決しつつあるカトリシズムは、もとよりクリスト教そのものであつて、それ以外のなにものでもなく、また永遠の立場を標榜するものであつて、とくに現代的なものでもなければ、いわんや近代的なものでも、さらに中世的なものでもありえない。

カトリシズムとは、超自然的秩序およびこれと自然的秩序との關係についての、天啓ならびに人間理性にもとづく、普遍的な原理と方法との唯一円満な体系である。^{※※}「我は道なり、真理なり、生命なり」(ヨハネ聖福音書一四ノ六)、「真理は汝等を自由ならしめん」(同八ノ三二)

※今日、これをカトリシズムといつて、キリスト教とよばないのには、およそ三つの理由がある。その一は、世間でキリスト教というときには、眞のキリスト教なるカトリックの教え以外に、東方離教(いわゆるギリシア正教)やプロテスタントのような諸宗派、さらにはキリスチャン・サイエンスのような、いかなる意味でもキリスト教とはいえないようなものまでも総括する名稱として、無反省に使用されているからである。その二は、キリスト教というものは、單に宗教——という名詞からニホン人が想像するもの——の領域にとどまるものではなく、その本質上、眞理と正義とにかかわる一切の問題に対処する原則を提供するものであるがゆえに、カトリシズム(普遍主義・公教)という、より客観的な術語のほうが、つごうのよいことがある。その三は、キリスト教は、具体的には、キリストの神聖意志によつてたてられたカトリック教會の、諸方面における活動にあらわれるからである。

広義のカトリシズムは、カトリック教會の活動を包括的にそうよぶわけなのであるが、とくにこれら諸活動をうごかす中心思想をカトリシズムとよぶこともある。この狭義のばあいには、カトリック基本思想体系というほどの意味である。(なお、社会的カトリシズムなどというときは、社会問題——とくに産業革命後の労働者生活の提起する問題——に対する、カトリックの原則とその適用を意味する。)

※※「公教要理」のほか、カール アダム教授の名著「カトリシズムの本質」、あるいは故岩下壯一師の諸著を参照されたい。小冊子としては、ロゲンドルフ教授の「カトリシズム」(アテネ文庫)が便利である。

カトリシズム・実存主義(ないし近代精神)・共產主義の窮極の相違点は、この三者が絶対者とするもの——すなわち天主・個人・社会集団——の差に歸着する。

そして、わたしは、それが現代の有力な一思潮であるという理由からではなく、キリストの神秘体の一員であるがゆえに、あらゆるばあいを通じて、カトリシズムの立場をはなれることができず、またはなれざることを欲しないのである。

じつさい、カトリシズムに背反し、教会を迫害するものが、いかに巧妙な口実によつて一時をあざむこうとも、結局は人間の敵であつたということは、歴史の証明するところである。

さもあれ、現代の世界において、政治・経済・思想・芸術についてかたろうというときには、カトリシズムの影響を度外視することはまつたくゆるされないことである。文学にかんしても例外でなく、詩・小説・劇・批評、さらに文学としての哲学や歴史など、あらゆる分野において、創作たると研究たるとを問わず、カトリシズムの生動復興がみとめられる。

もつとも、ニッポンにおいては、暴君秀吉にはじまるキリシタンの迫害以来、カトリック教会の勢力は今日にいたるまでなお微弱であつて、外国の物質文明や新思潮の安直な模倣にかけては、天才的な国民性にもかかわらず、現代の文学はもちろん、いかなる文化面にも、カトリシズムの発言力はほとんどゼロにちかひという実情である。インテリのあいだには、クリスト教に対するおそろくべき無知と宗教的無關心とが低迷し、大衆はいわしの頭にしがみつ、一方、支配階級はあいもかわらず天皇とその先祖なる邪神とをかついでいる、といったありさま。しかしながら、クリスト者にこつて、悲観はいわば第八の罪源であるといわねばなるまい。

※傲慢・貪慾・邪淫・嫉妬・貪食・憤怒・怠惰を七つの罪源という。

いつたい、カトリシズムの根底には、啓示にもとづく不可変の教義^{ドグマ}が存在する。しかし、人間の自然的能力に由来する眞善美の所産は、歴史的にはそれが異教文化の遺産であるとしても、論理的にはポテンシャルなカトリシズムとしてこれを了解しなければならぬ。※「聖寵は自然を破壊せず、かえつてこれを完成する」(聖トマス)からである。したがつて、われわれはニホン民族の伝統的文化財を繼承し、いわばこれに洗礼をほどこすことをつとめなければならぬ。この見地から、たとえば、仏教は超自然への予感として、儒教は徳への意欲として、これを了解することが可能となるであらう。また、美術の方面におけるニホン人の定評ある優秀性は、とりわけ美の源泉なる天主への「道を備え、徑を直く」

するものと考えられるであろう。

かくして、カトリシズムは、このくにの現状においても、決して生きた問題たる価値を失わないのである。

※ カトリシズムは、決して西洋の思想なのではない。天主が人祖(アダムとエワ)にその大本を授け、預言者たちを通じて次第にこれを明かにし、終にイエズス・クリストをもつてこれを完成したものである。そしてクリストは、これを万国万代に伝え、万民に救済を得させるために、カトリック教を建てたのである。故に、自然的・人間的なもののすべては、天啓の信仰及び道徳に背反しないかぎり、眞善美であり、可能的にカトリック的だといえるのであつて、これが聖なるものと結合する暁には、積極的にカトリシズムの内容を構成するにいたるのである。たとえばギリシア哲学のように。

二

以上、わたしは、文学史研究の前提として、その方法としての精神史を、わたしの根本的立場としてのカトリシズム、およびその現代史的意義について略説したのであるが、以下、これを文学史の問題に即しながら、もうすこし具体的にのべてみたい。

すでにのべたところによつて、もはやあきらかであろうとおもつが、わたしが文学史の立場としてのカトリシズムというのは文学史上にあらわれたカトリシズムのここをさすのではない。これももちろん、西洋の文学史では重要な、また興味ある課題ではあるけれども、遺憾ながらこのくにではほとんど問題としたりない。もつとも、さきにちよつとふれておいたように、ポテンシャルなカトリシズムの發現をニホン文学史上に追跡することは可能であり、また大いに必要でもある。このばあいには、文学史は問題史的に考察されることになるわけである。しかし、わたしのいう、立場としてのカトリシズムは、このような問題史上の一テーマと混同されてはならない。わたしがいうのは、人間が文学に対し、歴史に対し、その他百般の事象に対するときの根本態度をいうわけなのである。いわば精神の様式としてである。

文學創作者の立場としてのカトリシズムについては、研究者の關知すべき直接の問題ではない。しかし、文學作品が作家との關係において考察せられる段になれば、当然これは問題となつてくる。

※、この點に關しては、「カトリック大辭典」中、モリアツク執筆の「カトリック小説」の項を參照されたい。

また、歴史一般についての立場、すなわち史觀についていえば、クリスト教は本質的に歴史的な宗教であるから、最初から明確な史觀をもつていたのである。そもそも歴史哲學というものは、ギリシア哲學中には存在せず、クリストの出現をまつて、はじめて成立の契機をあたえられたのであつた。カトリシズムにまつて、歴史は天主の攝理の舞台であり、智慧と自由意志をあたえられた人間の試練の場所である。聖アウグスチヌスが「天主の國」において展開してみせた広大なスペクタクルは、今日のわれわれの胸にも、無限の示唆をもつてせまつてくるのである。

もちろん、歴史一般からただちに文學史を歸納できないことはいふまでもない。しかし、史觀のないところには、どんな歴史もありえない。文學史は歴史の流れのうちに作品や作家や文學運動を置いて、全般的な見地から、その評價や位置づけをおこない、もつて現代文學の理解と、未來の展望とに資するものでなければならぬ。だが、そうはいつてみても、文學ないし藝術という部門は、論理的にも歴史的にも、もつとも研究に困難を感じさせる分野なのであつて、共產主義の思想体系にあつても、藝術理論はおそらくもつとも構成のおくれた部門なのではないかとおもう。カトリシズムについてみても、たとえば社會問題についてならば、原理的にはむしろ簡單であつて——實際には資本主義者と共產主義者の強力な妨害のために進展をはばまれてはいるが——レオ十三世・ピウス十一世兩教皇による二大回章のごとき、權威ある指針も存在する。さらに、クリスト教的勞働組合や政黨も、現にヨーロッパにおいては、ある程度の具体化をみられている。また音樂に關しては、教養音樂の範圍でならば、聖ピウス十世による教書に、その根本方針が闡明されている。しかし、文學をふくむ藝術一般については、これらに相當するようなものは存在せず、われわれは自己の理性にのみたよつて、前進しなければならぬわけである。

さて文學とは、「言語による、人間心情の芸術的表現である」——「こかんがえられる。この言語・人間・藝術という三つの契機のうち、「言語」は一種の道具であつて、文學史の立場とは直接かわりのないものである。また「藝術」——そのクリスト教的意義については、いまは省略し、ただカトリック教会が、聖画像破壊者・カルブイン・キエルケゴールらの藝術否定論をしりぞけて、終始藝術の意義と權利とを擁護してきたこと——ちようぎ、ルターによる人間理性および徳性の否定論を、断乎排斥したのと同様に——を想起していただくにとめておく。ところで、「人間」の問題こそ、おそらく文學のアルファでありオメガであろうか。人間の心情を通して、人間自体をはじめ、万有とその關係を、いかに表現するかが創作の根本問題であり、いかに表現せられているかが鑑賞・批評・研究の根本問題であろうと思う。したがつて、人間に対する把握こそ、文學の死命を制するものといわねばならぬ。

いつたい、文學において古来つねにくるかえしくりかえしりあげられてきた問題の筆頭は、おそらく「愛」であり、これにつぐものは「死」なのではないかと思う。まことに愛と死とは、人間の神祕をもつともよく開示する事象だからである。そして、もろもろの世界観は、「愛と死」において、もつとも具体的な定着の場所を見いだすことであろう。

※ 「愛」というものは人間相互のあいだにのみ発現するものではない。ペルソナとしての天主とペルソナとしての人間とのあいだにも愛の交流は成立する。さらにまた、クリストの神祕体相互のあいだにも——すなわち、聖母マリヤをばじめとする天國の諸聖人、煉獄の靈魂および現世の信者の三者のあいだにも——超自然的な愛の交流が存在する。あえて神祕文學をもちだすまでもなく、たとえば、幼きイエズスの聖テレジア（カルメル会修道女、一八九七年死）の自伝がわれわれの心に深い感動をあたえるのは、このような愛の眞実が眞実にかたられてゐるからである。そして、神的な愛であれ、人間的な愛であれ、「愛」はクリスト教にとつて、アルファであり、オメガである。

そこでまず、この「愛と死」といつたようなテーマを中心に、文學の流れを問題史的に考察してみることが、具体的な文學史研究への第一歩として効果的なのではないかと考える。精神史的方法にもいろいろのやりかたがあるであろうけれど、問題史の面から入っていくのも一つの見識なのではあるまいか。そしてそのばあい、カトリシズム・実存主義・

共産主義等々のいずれの立場をこるかによつて、文學作品の理解や評價の面に、おのずから差異を生ぜざるをえないことになるであらう。

いま「愛」に例をすれば、愛の現象はまことに多端である。それは最も低い段階から最も高い段階まで、また合目的な形態から反目的な形態にいたるまで、無数のバラエティーを展開している。したがつて、そのなかのどのどのような段階、どのような形態がとりあつかわれようとも、それが藝術的眞実をもつて表現されているかぎり、それは一応文學として成功したものといえるであらう。そして、近代的藝術至上主義の立場からみれば、まづたくそれで十分なわけである。

しかしながら、もしも文學作品が、人間性全体の眞実の姿に故意に目をそむけ、低劣な愛にばかり興味を示し、あるいは姦通、売淫、男色等のごとき反目的な愛をのみとりあげ、または性的放縱や頹廢を礼讃するというようなことになれば、そのようなばあいには、その作品は果して人間の眞実をえがいたものといえるであらうか。

勿論、低劣な愛がかえつて高貴な愛をきわだたせ、反目的な愛の荒涼さが、正常な恋愛や夫婦愛の美しさをひきたせるといふような効果を發揮するばあいもある。そういつたことがないばあいでも、人間の醜惡面の探求が、それ自体惡だとか無意義だといふのではない。ただ、「愛」のばあいにかぎらず、すべて物事の一面的尖鋭化をもつて能事おわれりこする近代的偏見は、すみやかに克服されねばならない。そして、全き人間の良識を代弁するカトリシズムとしては、藝術の本質は美的調和に存し、人間の心に愉悅と高揚とを与えるものでなければならぬと考えるのである。

※ 平板な近代絵画的調和のことをいつていのではない。自然界と超自然界とをつらぬく高次の調和を意味したつもりで、たとえばシニールレアリスムの様式は、その点でむしろ近代的平板さをこえた美的調和をわれわれに開示するものである。

ちなみに様式史の原理としてのカトリシズムについても、いすれ考察しなければならぬわけであるが、今は省略する。

一例として、ダンテの「神曲」をあげよう。もしも、地獄篇だけをこりあげたならば、ひよつとしたら、ボードレールや

プエルレーヌのぼうが、もつとうまく表現してみせてくれたかもしれないという氣もする。しかし、天国篇にいたつてはまづたくダンテの独壇場であつて、ボードレールらがよしんば試みたとしても、おそらくダンテの百分の一も成功したかどうか、うたがわしいであろう。地獄・煉獄の兩篇にもまして、天国篇をあのようにすばらしく表現しえたという点に、ダンテの非凡さ、偉大さがあるのである。ダンテがボードレールよりも高く評價されるのは、「神曲」には全人間的、普遍的眞実が存するのに対し、「惡の華」等には、人間の一面的でしかも時代的な眞実——それがいかに近代精神にとつて痛切なものであろうとも——しか描かれていないからである。

まことに、「愛と死」のごとき、人生の祕義、もつとも深奥なるテーマを前にしては、三位一体の天主の内的生命としての愛、人間男女の創造、原罪（人祖が自由意志を濫用して、天主にそむいたこと）による原始義の喪失、等々の教義^{ドグマ}を認識しないものが、如実にこれを了解しえようとは考えられないし、一般に眞理の円満な体系たるカトリシズムの立場をはなれて、人間と人間性との眞実を、全面的に把握することは不可能なのである。（プロテスタンチズムをはじめとする近代思想にしても、実存主義や共產主義にしても、カトリシズムの体系から、一項乃至數項を抜きこつて、これを極端にまでおしすすめたものにほかならない。）

カトリシズムの立場は、万事万象——それが人間であれ、自然であれ——において、まず創造主であり主宰者である天主へと目をあげる。故に、一切は永遠の相下にながめられるから、実存主義のように、人間精神を氷の牢獄にとじこめる立場、あるいは精神分析學や弁証法的唯物論のように、これを荒涼たるリビドーや、生産様式の砂漠に解消させるような研究方法を、根本的に誤つていると考える。しかしながらわたしは、文學研究における精神分析學や弁証法的唯物論等の有用性を、全面的に否定しようとするものではない。これらは人間の動物的、また經濟社會的一面を、尖鋭にかびあがらせるうえには、いちおう便利な手段である。しかしそれには一定の限果の存することをわすれてはならず、その限界をこえてみずから万能の尺度としてふるまうとき、それはにくむべき反人間的荒涼に転落してしまうのである。

ところでまた、愛と死のごとき一般問題史のほかに、さらにカトリシズムの立場からする特殊問題史の分野も開拓されねばならない。たとえば、ニホン文學史における鎖国の意義のごとき問題である。鎖国とは、いうまでもなく、江戸幕府が、その非人間的、否、惡魔的支配体制を確立する上の、最大の障害であつたカトリシズムを、根絶する目的をもつて、斷行した暴虐な政策であつて、今日なおわれわれをなやませている泥沼のようなこのくにの社会制度の大半は、この鎖国時代の名残といつてよい。

※ ちなみに、江戸幕府にとつてかわつた明治政府も、その最初に実行した政策が、浦上キリシタンの弾圧と、天皇の神格化とであつたことは、近代ニホン国家の面目と運命を卜するにたるものではないか。

それはさもなく、江戸時代の文學が、世界文學のうちにあつて、はなはだしく見おとりのすることは事實である。西鶴のごときは、近世最大の、しかもユニークな作家であるにはちがいないが、人間に対する眞の「愛」を欠いたかれの文學は、はたしてほんとうに偉大な文學といえるであらうか。源氏物語が、西鶴の諸作品のような深刻さを有しないにもかかわらず、これらにまさるを考えられるのは、源氏物語にはともかく人間に対する愛——人間性の全体的把握——があり、そして「愛は多くの罪を掩う」からではないであらうか。いつたい江戸時代の文學には——文學にかぎらず、美術・音楽、また仏教・儒教・国学等々にしても同じことだが——一般にこの時代特有の愚劣さがしみついていて、わたしは少年の昔から、さうしても好きにはなれなかつたものである。そして、その理由を説明することができないでいたのであるが、思うにこれは、眞理と人間さに対する狂的な抑圧と、レジスタンスの不成功による、時代そのものの墮落に起因するさうべきなのではあるまいか。

以上のような次第で一般ならびに特殊問題史の方面から、文學史の研究に入つていくことを、わたしは考えてみたのであつて、この小文においては、その基本的前提について若干の考察をこころみたわけであるが、筆者の未熟、あらずもがなの啓蒙的記述にページをついやし、具体的な方法等の追求に不足をしめしたことを、かえりみてふかく遺憾とするものである。